

2024年7月30日取材

長野県

産地レポート

レタス

J A長野ハケ岳
猛暑と不結球を乗り越え

新品種

「ビートガイ」

ハケ岳に登場！

(編集部「取材・文・撮影 三好かやの」)



↑(左から)川上支所の営農指導員中島俊樹さん、高見澤寛さん、良さん、指導員の原知樹さん。



↑(左から)JA長野ハケ岳農業部の大塚知一さん、南牧村の生産者津金武幸さん、南牧支所営農指導員の吉澤栄一郎さん。



↑園場から南牧支所の集荷場へ搬入されたレタスは検査を受けた後、真空冷却槽へ。しっかり芯まで冷やして鮮度を保ち5℃の冷蔵庫で保管される。

日本屈指のレタス産地で

J A長野ハケ岳管内は、日本屈指の高原野菜の産地。標高1000～1400mに位置する冷涼な内陸性気候を生かし、レタス、ハクサイ、キャベツを露地で栽培しています。5～10月は管内全域で359人の組合員が、約1857haでレタス類を栽培。その75%に当たる約1388ha(2023年産)を、結球レタスが占めています。

冷涼地として知られるハケ岳周辺でも温暖化の影響が顕在化してきました。「2013(平成25)年の夏、野辺山で30℃を超えたと、管内に衝撃が走りました」

と、当時を振り返る南牧支所営農指導員の吉澤栄一郎さん。かつて6℃台後半で推移していた年間平均気温は、徐々に上昇し、2023年は8・8℃に。その傾向は今も続いています。園場では高温によるレタスの傷み、



地域概況

JA長野ハケ岳は、小海町、川上村、南牧村、南相木村、北相木村の1町4村で構成される日本一の高原野菜供給産地です。ハケ岳の裾野と千曲川の源流を有し、標高は1000～1400m。高冷地で栽培される露地野菜は、「太陽に一番近い野菜」とも呼ばれています。主力のハクサイは6月上旬～11月中旬、結球レタスは5月下旬～10月に出荷。非結球レタス、キャベツ、ブロッコリーなども栽培。全国の消費地へ届けています。

抽苔の増加などが頻発。生産者は時間を前倒しして深夜の2時から収穫を開始。黒マルチを銀から白黒へ変えて地温の上昇を抑えるなど、あらゆる手立てを講じてきました。これまで暑さと病気に強い品種が次々と登場しましたが、温暖化はさらに進んでいて、より耐暑性のある品種が求められています。

各支所で指導員が品種を選定

管内には小海、川上、南牧、南相木、野辺山の5つの支所があり、合わせて12人の営農指導員が、各エリアで新品種の試作、試験、選定に当たっています。各支所とも土壌や地形、販売先などの諸条件が異なるので、どの品種を導入するかは現地の指導員が判断しています。

南牧支所の吉澤さんは、3年前「ビートガイ(試作品種名TLE595)」に着目しました。



←
川上村で40年以上
レタスを栽培して
きた高見澤覚さん
も、いち早く「ヒ
ートガイ」に着目。



↑高見澤さんは、「ヒートガイ」を株間24cm
×畝間46cmで栽培。



←
干ばつが続いて不
結球ぎみでも、最
終的にがっちり結
球。それが「ヒ
ートガイ」の特徴。

←
肉牛の肥育も手がけ、循
環型の栽培を続ける津金
武幸さん。「ヒートガイ」は、
ガチッと結球するのがい
い」と評価している。



↑昨年新設された川上村の集荷場。真空予冷装置で
芯まで冷やされたレタスは、全国の市場やファス
トフードチェーンなどへ発送される。

「耐病性、晩抽性^{ばんしゅうせい}に関しては、一定以上のレベルがあり、特に軟腐病に強い。即導入できそうだと感じました」

一方、川上支所の指導員、原知樹さんは、若手を中心に組合員の圃場で試験栽培を実施しました。するとこれまで8月下旬～9月上旬の二毛作栽培で出荷していた品種に、不結球、分球が多発することが判明。しかし、同時期に栽培した「ヒートガイ」は、一時的に不結球気味になっても、その後持ち直してしっかりと結球することがわかりました。

レタスの出荷形態には、収穫適期にカットしたレタスを段ボールに詰めて出荷する市場出荷と、決められた期日に定量出荷する契約栽培がありますが、後者の場合は、適期が長く、数日間結

球したレタスを圃場に残しておける「在圃性」が求められます。

こうして厳しい環境下で、耐暑性、耐病性、在圃性……多様な性質が求められる中、「ヒートガイ」の本格的な栽培が始まりました。

猛暑に負けず しっかりと結球する

南牧村でレタス4haを栽培する津金武幸さんは、2022年11月、農協青年部の視察でタキイ長野研究農場塩尻試験地を訪れた際、初めて「ヒートガイ」を目にしました。育種担当者の「暑さに強い品種です」との熱意に押され、種子を購入し、翌年から栽培に着手します。

「去年は猛暑で、同じ時期に栽培していた他の品種は不結球でしたが、『ヒートガイ』は、ガチッと結球しました。本当に助かりました」

そして今年は、干ばつが予想される時期の出荷分や、これまで不結球が出ていた7月上旬～8月上旬の定植分は、すべて「ヒートガイ」に切り替えました。津金さんの予想通り、今年も猛暑が続いていて、圃場は乾燥気味。10a当たり2000～3000ℓの水が必要で、トラクターに1000ℓ入りのタンクを積んで、圃場を何度も往復し、8月中旬に始まる出荷に向け、ブームスプレヤーで散水する日々。「ヒート

ガイ」は順調に生育しています。

一方、川上村の高見澤覚^{さとし}さんは、レタスを栽培して40年以上のキャリアを持つベテラン。7年前から次男の良^{りょう}さんも栽培に加わりました。

JA長野八ヶ岳管内では、高見澤さんのように、農家の子弟が帰郷し、さらに技能実習生を雇い入れ、規模拡大に乗り出す生産者が10年ほど前から増えているのです。

猛暑の影響で、不結球の割合が増える中、高見澤さんも試験的に「ヒートガイ」を作り始めました。すると、「結球性が抜群にいい。そして病気にも強い」

かねてから、試作品種の栽培試験に協力が続いている高見澤さん。いち早くその可能性を感じました。

取材に訪れた7月30日。高見澤さんの「ヒートガイ」は、欠株や目立った病害もなく、4日後に収穫を迎えるまでに。お話を伺っていると、にわかに強い雨が降ってきました。

「こんなにいい雨は久しぶり。これで不結球ぎみの球も持ち直すでしょう」と、明るい表情で話されていました。

高温と不結球に強い「ヒートガイ」は、本格導入から2年目にして実力を発揮。今後は二毛作、三毛作への対応、在圃性の確保など、新たな課題も視野に入れ、夏のレタス需要に役立てていきます。